



千葉県最新医療情報紹介

頭頸部がんに対する 動注化学療法

容貌や機能は守り、がんを消す！
切らずに治す最新治療。



国立病院機構千葉医療センター
頭頸部外科・耳鼻咽喉科

清水 恵也 医師

臨床研究部長
沼田 勉 医師

首から上の脳と眼球を除いた部分にできるがんを『頭頸部がん』と呼びます。頭頸部がんでは完治はしても、顔の変形や食事や会話がでなくなるなどの、後遺症が大きな問題となることがあります。

そこで注目されるのが、「頭頸部がんに対する動注化学療法」という最新治療です。平成16年からこの治療法を導入している千葉医療センターの沼田勉医師と清水恵也医師に解説していただきました。

待ち望まれる体に優しい治療

鼻やのどの奥、口の中などに悪性腫瘍

が発生する頭頸部がん。その治療の中心となっているのは、手術による切除です。

手術はがんの病巣を周辺組織ごと切り取るため、大きな手術が必要な際には顔が変形し傷が残ったり、話すことや食べることができなくなったりする後遺症が残ることがあります。

例えばがんを喉頭ごと取り除かざるをえない場合には、声を失い、首に空けた穴（永久気管孔）から呼吸を行うようになってしまう。

手術の際には切除部位の再建も行われますが、顔の形や機能を完全に回復させるのはなかなか難しいのが現状です。

できるだけ大きな手術を行わずにがん

を治し、機能や容貌を守りたい。それは頭頸部がんの患者にとって切実な願いであり、医療者にとっても重要なテーマです。

抗がん剤をがんだけに集中投与し、
放射線治療を併用する

頭頸部がんは、抗がん剤や放射線が比較的効きやすいがんです。また、舌は舌動脈、喉頭は喉頭動脈といったように、各臓器がそれぞれ固有の動脈を持っているという特徴があります。動注化学療法は、これらの特徴を上手く利用した新しい治療法です。

通常の抗がん剤治療では、点滴と同じように静脈から抗がん剤を投与し、全身にいきわたらせます。それに対し動注化学療法では、がんのある部位に栄養を供給している動脈にカテーテルという非常に細い管を挿入し、そこからがん病巣へダイレクトに抗がん剤を注入。高濃度の抗がん剤をがん病巣だけに集中的に送り込めるため、治療効果が高く、がんを消失させることができます。

さらに、通常の点滴と違い抗がん剤の注入を動脈から行うので、静脈からは抗

■動注化学療法のみで治療した舌がん

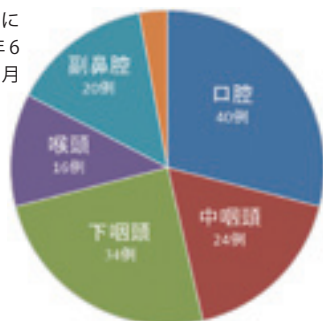


治療後4年経過し、再発や転移を認めない。

■動注化学療法で治療した頭頸部がん138例

千葉医療センターに
おける平成16年6
月から平成22年5月
までの症例データ

Stage I 2例
Stage II 30例
Stage III 30例
Stage IV A 70例
Stage IV B 6例

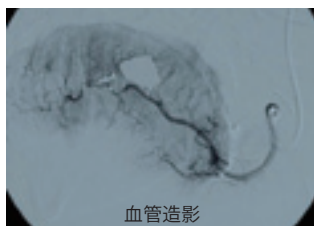


■治療効果—原発巣：138例中

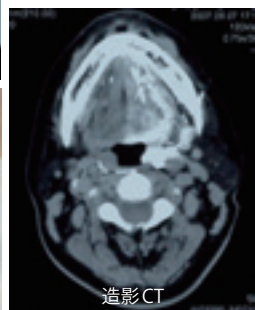
著効 123例(89%)
有効 15例(11%)

※著効は治療終了時点で、がん病巣の確認ができなくなった症例。有効は治療終了時点で、がん病巣に縮小の認められた症例。

■カテーテル留置



治療の際には、血管造影、色素などで抗がん剤が適切に分布していることを確認する。(病巣だけに届いているのを確認)



がん剤の中和剤を注入することができ、全身の副作用を一層少なく抑えられる点も大きなメリットです。

頭頸部がんの動注化学療法は、通常、放射線治療の併用が基本となります。千葉医療センターでは、頭頸部がん治療の第一選択肢として、この治療を行っています。がんが残った可能性のある患者さん、再発の認められた患者さんに対しては、これまで通りの手術と再建治療が行われます。

痛みや負担をより軽くする

カテーテル留置法

頭頸部がんの動注化学療法には、大きく分けて二つの方法があります。

一つは、太ももの付け根の動脈からカテーテルを入れ、抗がん剤を投与する方法。もう一つは、耳の前などからカテーテルを入れそのまま留置する方法で、千葉医療センターで行っているのは、この留置法です。

局所麻酔を使い、耳の前や後ろ、顎や首など、目標とする動脈に最もカテーテルを入れやすい部分を少しだけ切り、カテーテルを挿入。一度入れたら1ヶ月から2ヶ月間入れたまま留置し、週に1回、そこから抗がん剤を注入します。

太ももの動脈からカテーテルを入れる方法では、一日ベッドの上で身動きせずにお過ごしなればなりません。留置法なら自由に動けます。抗がん剤投与のたびにカテーテルを入れたり出したりすることもないので、患者さんの痛みや負担を大幅に軽減できます。

この治療を行っている施設はまだ多くはありませんが、千葉県内でもすでにいくつかの病院で行われ、高い治療成績を上げています。

今後、動注化学療法は、頭頸部がん治療の選択肢のひとつとして、さらに進歩していくものと思われます。